

女坑夫の記録

田中, 豊一
三井不動産

<https://doi.org/10.15017/13608>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 5, pp.86-96, 1975-06-25. エネルギー史研究会
バージョン :
権利関係 :

女坑夫の記録

田 中 豊 一

一、Mさんの紹介

石炭産業の動向を考えながら、個人の歴史はいったい何なのかという視点に目を据えておくことも必要であろう。いわば個人の生活史をたどってみようという試みである。私は、あながち無駄なことではないと思う。いやむしろ、資料としての記録から欠落している部分、石炭産業という機構の中の生身の肉体の部分を補うといったポジティブな意味さえもっているかもしれない。むしろ私のこの聞き書きの記録が、それほどの内容をもっているとはけっして言えない。なぜなら、いまだ私の方法は稚拙であり、拙劣であって、話し手の心情を理解しえてないからだ。彼らや彼女らは、けっして私と遠く離れたところにいるとは思わないが、それにもまして近くにいるとは思えない。

ともあれ、一人の炭鉱労働者の個人生活史（らしきもの）を提出しよう。私が接し得た限りという制約つきであるが……。これはまた、一人の女性労働者の証言でもある。

Mさんはつつましい人である。いつも自分のことを抑えて話す。ほとんど自分を飾ろうとしないし、不確実な事や自信のないことは口にしたがらない。しかも、私との間には、性の相違というかなり決定的な制約があり、彼女のつつましさが更に口ぶりを重くしたようである。彼女の心情をつかみとれないようなもどかしさがあった。森崎和江の聞き書き『まっくら』でも、そうした困難さが語られていたが、彼女の場合は、少なくとも女性どうしという気易さが多少はあったかもしれない。『まっくら』では、聞き書きのおもしろさが縦横無尽に発揮されている。むしろ、炭坑のかかわりの深さなど比すべきもないから、そこに問題点が

あるかもしれない。また、世代の差が大きく、理解できなくて聞き返す場合も少なくなかった。

Mさんの話には、ほとんど暗さがない。いつもはずかしそうに話しながら、暗い話もほとんど出てこない。筑豊の話の暗さ・重苦しさを考えながら質問するからだろうか、いつもはぐらかされたような気になり、再度確かめたりする始末だった。中小炭鉱は中小炭鉱で家族的な面があり、大手炭鉱は大手炭鉱で経営の機構が近代的である。ことに多久市（佐賀県）周辺は、そうであったという。Mさんには、私が何度聞いても「そがーん悪か人はおらんかった」という返事しかもらえなかった。庄制ヤマも全く経験しなかったという。炭鉱というと、人々の目はほとんど筑豊に向けられてしまう。その悲惨さの典型は、中小炭鉱であるが、肥前の炭鉱は、筑豊に増して中小炭鉱の比率が多いにもかかわらず、暗い話が伝わってこない。そこらへんから肥前の炭鉱の特殊性といったものに接近していくのも一つの方法ではないかと思う。（私の聞き書きで提示されているものももっと範囲が狭く、多久周辺の特異性にすぎないかもしれない。もっともそれほどの内容がまだ掌中にしていないということは割り引かねばならない。）

Mさんは、明治四十五年三月十五日生まれ、現在六十四歳である。蔵木村の貝島炭坑の社宅で生まれ、大正十二年数えの十三の時にはすでに炭坑の仕事にはいり、昭和二十八年二月十五日（Mさんはこうした日付をよく覚えておられる。記憶力のよい人である。）に柚ノ木原の小林坑をやめるまで、炭坑で過された。現在は失業対策事業の仕事で、現場をまわられている。（Mさんは、失業対策事業にはいった時期も、正確に

二十九年の九月一日だと覚えておられる。)御主人がもうすでに体の自由がそれほどきかなくなり、Mさんひとりが働いているという。生活ぶりは、それほど楽ではないようだ。けれども、彼女の話や彼女自身はそれほど暗くはない。どこか魅力のあるおばあさんである。いやおばあさんというのはあたらないかもしれない。今でも現役の労働者だから若々しいし、体もまだ随分強いだろう。とにかく人柄の魅力があつて、どこか盤石なところもあるのだ。

私は彼女の生活史の一部に触れて、(私は彼女の歴史のヤマの裾野を徘徊したにすぎない。)心情の高揚を味わつたりもした。貴重な体験の記録として残すことよりも、私にとっては、心情が交叉するという経験の方が重要だつたようにも思える。

二、Mさんの話―ある女坑夫の記録―

だいたいはもうお父さんたちは袖ノ木原におつたてです。あすこにおつて、それから貝島にいったとでしょう。そして私もあそこで、貝島で生まれました。

そこで生まれてですね、うちがきつかつたですけん、ほんならもう六年まで行くぎよか(行つたらよい)てゆうて、わたしはもう学校は好きはせずですね。そいけんはじめは、中野さんという坑長さんうちに、ひひて(一日)行つたですよ。卒業してからすぐ、かせいに。ねえちゃんにやつてくいろていわれてですね。そしたら涙の出て、涙の出て……。親元から、いくら貧乏でも、はじめてあがんすつとですけん(あのようにするのだから)、そいけんあくる日はもう、「おくさんわたしはもう頭の痛うしてもうあがんとは休むけん」て帰つてですね。もうたいていむかえにきんさつたばつてん。十三の時です。卒業してからすぐじゃもん。

それからもう、うちは「選炭に出たがまし」てゆうて、選炭に行つた

ですもん。選炭に行つて、そして二ヶ月ばかりしよつたばつてん。機械選炭の目のまう(目がまわる)もんですけん、もうそいぎ(それなら)うちは、坑内に下がつたがましてゆうてですね、そして坑内に入つたですもんね。二ヶ月ばかりしてから。そん時がさあもう三十三銭じやつたですたい、選炭が。

夕方の六時から朝の六時まで十二時間ですもん。そいぎ子供じやけんやっぱい、こぶないかまめないか(コンブやらまめやら)買うて食べじなです(食べない)と)、もう眠とうして、もう十二時頃になつぎ(なると)、こううつたおるつごと(倒れてしまうように)あつとですよ。その選炭機械でえりよつても(選びたしてても)、石を。そいぎ「もう坑内にいつたがまし、おら坑内に下がつばい」てゆうて、そしてそん時は六年生、ちよつと入せきのできおつたですけんねえ。はい、みんな卒業したらしおつたですよ、十三で。三十三銭ですけんねえ。

学校にはわりかたにみんな行きおつたですよ。やっぱ貝島さんてゆうぎ、私立学校までたててなかつたですけんね。はい、貝島私立学校……。小学校ですよ。岩屋駅のほんのうらの。生徒は四千人ぐらおりやせんじやつたでしようかね。うんにや、八〇〇人じやつたろかね。そのちよつとわからんですばつてん、大きか炭坑じやつたですもん。八〇〇でしようね。八〇〇てゆうよ(有余)ていうたごたあつたです。

大きか炭坑じやつたですよ。そして坑内について、うちがやっぱいきつかもんじやから、いくらないか(いくらになるか)……。坑内では五〇銭ぐらいいらおつたでしようね。選炭が三十三銭じやつたですけん。二ヶ月ばかり(二か月ほど)おつて、選炭が三十五銭じやつたですもん。やっぱ五〇銭ぐらいいもんじやつたでしようね、そん時。記憶せんとですよ。選炭が三十三銭じやけん、十何銭ぐらいいの差ですたいね。おとうさんは仕繰り夫じやつた。仕繰り夫じやつたですけんね、そいぎおとうさんのあとむきに。

やっぱいくらしのきつかったですよ。おとうさんが一円がとすつき、おかあさんが七十銭か八十銭かするからですね。それで家族が多かったですけんね。おとうさんはお酒飲みおんさったけん、うちは。

それからと。それで私が十八で結婚したもん、今のとうちゃんとうちが十八で、とうちゃんが二十七じゃった。結婚してですね。うちですか。うちん人は、坑内の採炭じゃなかったばってん、掘進夫じゃった。

そして二十一の時ですね、貝島へんはもう女が働かれんことなつたですもん。はい、大ヤマじゃったけん、女が働いたらいかんことなつた。

それでも、十三の時からそれ時まで働いたつたですけん、八十二円かいくらかもらつたですよ、退職金が。貝島さんの時は、ほんとによかつたですもんね。

それでも、それからまた二・三年、四・五年はもうほんとに女が働かれんじゃつたけん、もう子供の守りどんしてですね。そして二十六の時、また新屋敷さん(に)におつた(移つた)です。新屋敷に一年ばかり。そんな時、たいのはな(朝霧)に行こうかどがんしようかていいおつたですばってん、たいのはなというところもまた、「なんでん道具でん持つて行つたら、置いてくるごと、ようなかてばい」てゆうて。そういうもんで(そう言うから)、「そんならどがんしゆかなあ」てゆうとつたら、そんなら新屋敷にちようど知つた人のおつて、野中納屋というところのおんじさんが、「今頃はもう、うちの大納屋じゃ、うちやもう二円がとしよる」てゆうて言わすもんじゃつたですな(言うものだから)、そんならもう、「行つてみようか」いうて行つたですたい。そしたら、二円がた(二円ぶんは)できおつたばってん、体がやっぱいきつたですもんねえ。はい、スラひきです。スラはひかんなんじゃつた。そこはもう軽便じゃつたです。写真はなかですもんねえ。そがん時ひとつも写つたらんとですよ。

そして、そこに一年ばかりつとめて、そして、「こりや炭坑はあがっ

たほうがよかばい」てゆうて、佐世保さん(佐世保へ)行つてですね、佐世保の市役所の仕事どんして、そして、「やっぱこりやもう坑内が一番よか」てゆうて……。

それからどがんじゃつたろかね。佐世保さん来て、それからまた、ずーとあつちこちの炭坑ば行つたですよ。あのー伊万里の先のまえはまというところさん……。いやはじめはまた岩屋の五坑というところに行つたです。新屋敷のあとが佐世保に行つて、それからまた岩屋の五坑に……。そんな時は、私は働かんかつたですばってんねえ、父ちゃんが一人働いて。それから、そこからまたあそこさん(あそこへ)、伊万里の先のまえはまというところさん行つて……。前浜に行く時は、下村から行く時は、百円かつて(かりて)ですよ。肩入れ金でゆうて、かつて。

あそこは大納屋の吉村さんという人が、うちのおとうさんの友だちじゃつたけん、大納屋と一緒にいたです。大納屋の吉村さんからさそわれて、そして行つたです、あすけ(あそこへ)。そしてあそこに一年ばかりいたです。もうそんな頃女もやっぱ働かれてですね、その炭坑は。二人で仕繰夫しよつたですもん、そして二人で四円五十銭ぐらいしおつたけん、よか生活じゃつたですよ、あつちでは。とうちゃんが二円五十銭、私が二円ですね。四円五十銭がとしおつた。

(移ろうする時は)やっぱ坑内の条件の悪かつたりする時です。私たちち親子三人じゃつたですけんねえ、わりとそがんで……。とうちゃんが酒は飲まんかつたですすね、タバコのむぐらいだつたけん、そがんで(それほど)苦勞てしとらんですよ、もう食うす食わんでいうことは(なかつたですよ)。それから私が小さかつたときや、うちがきつたつたですけんねえ、でもそがんはなかつたですばってん。

私は子供もたんです。二十一の時、娘はひとり養子にしたとです。はい、そして親子三人。今、京都におります。もう四十三か四になつて。

それからですねえ、もうまたあそこがあんまりまたよくなかごとなつ

おったですよ、はい……。このつから「おいもごんごうズラ（ごんごうは五合だが、ふつうのストラの半分という意味だろう）ひきおった」てゆうて、こうまか（小さい）ストラつくってもろて。そいぎ、このつから行って、「学校も行ってらん」て言いよったですよ。ほんなこてもう燃やしてどんおらんぎですね、うちの父なんかもう小さか時、勉強しよったていうとの本のですね、あったすばってん、そりゃ燃やしとんもんねえー。そりゃもう、とじてあったとの、もうりっぱな紙で、和紙の本じゃったですよ。もうほんのこて、つん燃やして（燃やして）しもたもんねえー。惜しかったですよ。父なんかおっき（おれば）まーだ話すでしよばってんねえ。兄貴なにかも。兄さんも、私の兄も、早う死んで、早うてゆうが、もう五十五才かね、失業対策にお世話になつたすばってん、死んだですもん。そいももう十四から下がったですよ。坑内に、兄が。その私の兄が、それはもうほんのこて、学校に行きとて、行きとてしてたまらんばってん、わがうちがきつかもんですけんねえ。あのほら、Nさんて校長先生のおっでしよ、同級生じゃったです、うちの兄貴と。兄貴も（勉強の）でけん方じゃなかったもんですから、いきたかてしおったとばってん、うちのきつかもんで、行かれじ（行くことができないで）、そいでもう、N先生も、船山君遊びおいでてゆうてくれおんさつたて、しよては（はじめは）。もうそいばってん、うちや失対で、むこうは校長先生じゃってゆうて。私も知つとつてあるもん。知つとつですよ。小さかとき貝島ば出とんさるけん。もう何年前までは、うちの兄さんの卒業した写真もあつたけんが、N先生もうつとさつたけん、六年の卒業写真に。学校は六年生まで。あの人は八つ学校じゃつたけん、十四で卒業したですよ。私は七つ学校じゃつたけん、十三で卒業したですよ。

はい。昭和十二年頃が、新屋敷におつたて思つてすねえ。十二年頃じゃなかつたでしよかかね。小林坑に行った時ですな、ずーとストラひ

いて登つてきおつたです。百斤でね、百斤で二十銭かいくらかやつたて思つた。二十銭か二十二銭か……。小林坑に来た時が。ちよどまだ、捲にならんですね、ストラばひきおつたですもん、それこそからいかけて。一日でどんぐらいすつじやろかね。やっぱいうちたちが、六百斤か六百五十斤はにゃ（程しか）ひつきらんじやつたですもんねえ、そいば（それを）二、三ばいひく。三人もやい（三人でいっしょに）でひくぎ、いくらぐらいなすかかねえ、三人で。うちん妹なんかはやっぱい、七八百斤、どがんじやいすれば（どうかすると）、八百斤ぐらいひいてきおつたて言いおつたけん、二十銭にして、二十八でしよ、一円六十銭ですなえ。二、三円ぐらいしおつたつじやなかるか、三円がとぐらいですなえ。三人もやいで六ばいひくぎ、三人で……。三円がとぐらい、三円五十銭じやいろ……。いくらしおつたじやいろわけくちやわからんことなつた。ようと考えなわからん。

はい。妹はもう、妹だけはあそこの高等青年学校に行って、青年学校じやいろ、高等学校で言いおつたかねえ。あそこの巖木の……。高等小（）来たつてすもん、あいたちは。そいけん、十八頃から下がった。

兄弟は五人じやつたですばってん、もう弟を一人なくしたですよ。弟が十九の時、貝島炭釜で、ガス爆発して。ひとりあれでなくなつて。私の次じやつたです。三番目、はい。十九の時。私のすぐ次の妹は、よそに奉公してすな。あれは炭坑にも、ひとつも行つとらんです。私たちが、二人が一番働いたつてすたい。兄貴と二人。妹はなんでん二、三年働いたじやいろ（かどうか）、小林坑にですなえ。

ほんともうきつかつた。もうそん時ほんのこて、長ぐつどん持たりする者なおらんかつたですけん。私は、その遠足の時、先生に連れられて行って、船山に、のどのかわいてのどのかわいて、先生にやだまつてすな、——水筒持った者なもうよかとこのお嬢さんなんか二、

三人どま（ぐらいは）おんさつたらか。もう他ん者なあんまり持たんじやつたですー水飲みでん行つとつて、心配かけたことあつたですよ。先生に言わんでおつて。そいだけ貧乏じやつたですけんねえ。はい、あの弁当はやつぱり持つて行きおつたですな。お米はやつぱり安かつたでしょうねえ、そんな時は。お米はやつぱり十四、五錢じやなかつたらかと思つとつたすね、その頃は。そいけんわりかたにすね、お米の安かけんが……。きつかつたですばつてん、麦御飯なんか、ほんのこて食べたこたなかつたです。

炭坑は、ほんに暮しよかとこじやつたですよ、働さしやあがすつき（働ささえずれば）ですな。働かんですつきいかなばつてん。納屋ぼかりじやつたです。そういう納屋もわりかたに、小林坑なんかは下はわら屋根のあつたばつてん、今度は上さん（上の方に）新しゅう建てんさつたけんですな、二間ぐらいでわりよかつたです。貝島へんももう、私たちが所帯もつたときや、四畳半にすね、板張りのひとつあつて、そんなくらのもんじやつたです。そしてまあ家族の「よんにゅうか（非常に）多か」とこはすね、二間ぐらいじやつた。設備もそげん（それほど）悪うはなしですな、貝島へんは。燃料はガラです。ガラもやいてちゃんとし。配給てあとおつたと。朝もう早うからならんどつてすね、そしてふだば買うて、そしてガラ買にてちゅうて。

納屋は、やつぱ納屋頭ちゅうとおつたです。納屋のいくらであつたですもん。納屋は、納屋制度のあつても、貝島へんなそがん悪か人でおつてなかつたです。よその炭坑は、疋制ヤマのあつたていいおつたですばつてんねえ。貝島ではそがんなかつたです、わりかたに。はい、柚ノ木原もそがんですな。悪か人でおらつさんかつたです。新屋敷もそがんな納屋制度のあつたです。はい、大納屋てゆうて。どこでんやつぱりあつたですな。あつちのまえはまへんもあつたですもん。その吉村納屋てゆうとの……。そいから他にもいろいろ納屋の納屋頭の人もおんさつ

たですもん。吉村さんちゅう人が、うちのおとうさんの友だちだつたです。「こつちやん（こつちに）こんか、来てみんか」てゆうて。

肩入れ金は、やつぱい会社が貸すつとですもんね。そんな時は、百円、よう出して百円ぐらひです。はい。そんな時の百円はよう貸したつたすよ。そりやあもう、払わんなんとですけんねえ。もう百円借つとつたつちや（借りていたとしても）働さしやあがすつき（働ささえずれば）ですな、なんてそがん……。まあやつぱりくれらつさんともあつたすばつてんですな、ひまを。うちたちわりかたに……。「まあいつとき（もうちよつと）辛棒したらよかつたの」てゆうていんさる（言われる）ばつてん、やつぱりもう長うひまはやいおらつさんやつたです。もうほら、悪いこともそれほどなしですな、酒も飲まんけん、主人が。新屋敷でも、新屋敷におつた時でもすな。ひまはでんもんで、とうちゃん（が）ひとり働さ行つとつたです。佐世保に上がつてゆうて、炭坑上がつてゆうて、おつたばつてん、「もうまあいつとき（もう少し）辛棒してくれろ」てゆうて、ひまのでんもんで。そいぎ私がひとりおつた。そいぎ大納屋のおんじさんが、その人もうちんおとうさんのつきあいじやつたもん、まだ二十七ぐらいじやつたですけんねえ、「女ばひとりおいとつて、もしものことあいきいけんが、やつぱいこりやひまをくれにやいくみやあ」てゆうて、そんなときやくれてくんさつたです。

結婚した頃ですな。なんてもう十八じやつたけん、ちよつと満でいうなら、三月の二十日じやつたけんが、十七才ですな。そいぎもう、うちも、まだいかにわすを無理矢理行つたですけんが、そいぎもういつときは（しばらくは）、うちにかせして（加勢して）ですな、まだうちがどがんしゅうもなけてゆうて、いくらかかせしおつたつたすよ。いっしょにおつて、うちの主人といっしょにうちにおつたすよ、兄貴もまだ嫁さんもろとらん（もらつていない）やつたばつてん、うちにいっしょに寝泊りして、そしてはたちの時家別れたです。そしては

たちですこん（あそのの）貝島のシンチ二丁目というところへ）
家は一軒もろてですね、そして所帯もったです。そんな時は、まあい
くらかかせしおったでしょう。うちの父がずーと私たちのかせしおった
とば、いくらいくらちゅうてつけおったごたあつたもん。

小さい時はですね、小きか時の私たちの遊びは、はじきでんなん
じゃったですね。それからおてだまでんあいおったですよ。したいよう
にしきらんとですもん。おてだまでんなんでん。むくろはじきてあい
おったですよ。むくろばこうしてパチパチあてたり。それから、じゅう
じゅうだまてゆうて、じゅうじゅうだまて小きかとのあつてしょう。あ
がんとをはじいたり、そがんとのお金のかからんごたあるとやつたす
ね。

小づかい銭はですね。一銭はなもらいおらん。一銭もろてもう、「ま
あ一銭（もう一銭）くれんな」てゆうぎ、「もう一銭使うたろが」てゆう
て、叱られおったですよ。二銭ももうほんなこて、めったにもらわん
ごたあつた。今頃のいくらでしようか。そいぎもう山ひきでんなん
でん、岩屋の山ひきでんなんであつてしょうが、そんな時五銭もらう
ぎももう……。山ひきちゅうぎおくんちですね。そいでもう、一銭
でん二銭でんもらうとがよかつたうちじゃないでしようか、まーだ
ねえ。炭坑へんな、やつぱい店がずーとあつたですけん。はい。農
村はそんなに店のなかでしよう。炭坑はもうずーと広場であつて、
そしてずーとまたまわりにや店もあつたですよ。そんな時は、一
銭がと（一銭分）使うぎ、えんない（ずいぶん）ありおつたす
もんね。

学校でも遊びは、やつぱいおてましたりですね、女の子は。そ
がんふうなとじゃつたろ。きものじゃつたでしようが、今は洋服ば
つてん、みんなきもんばつかりですねえ。まーだ綿入れどまあん
まり着たことはなかつたごたあつたですよ。はい。羽織どんきて、
下駄はもう、雪の降る日は高下駄はいて、靴でんなん
でんなかつたです。あとーになつてからですね、くつは。私
たちが六年生ごろになつて、ようようゴム靴の（

できた）。高げたは雪のつまつて、そしてカタカタして行き
おつたですよ、学校に。ひっか^{（文）}けた下駄はいていく人もあつ
たすばつてんねえ。

うちはでけんじゃつたばつてん、学校は好きじゃつたですよ。わり
かに。でけんでも、ずーと皆勤賞とかてゆうて、ほんとに先生にほ
められおつたですよ。勉強はあんまりでけんほうじゃつたけん。い
えー、でけんとはしゃもん。好きでも、「はい」てゆうて、今これ
をわかつて、「あがん言いおんさつとばつてんねえ」てゆうて、手
を挙ぐるとが、ほんにはずしかごとしてですね。発表能力のな
かつたじやろ。なかつたつてしょうね。

ほんに貝島さんはよかつたすねえ。やつぱい小ヤマで、
压制するところもあるしですねえ、うちはそがんとこは、あんまり
行つたらんごたあつた。あるばつてん。そらその時は、けんか
でんなんありおつたですよ。けんかなんかほたいい。はい。「けん
かのあいおつぞお」てゆうて、ドス持つてですね。そりやもう
見きらんごたあつた。そいからだんだんそいがよくなつて
ですね。もうそがん遊ぶごたあつた。おらんごたあつたす
ばつてん。リンチみたいなのは、そこでは見らんごたあつたす
ばつてんね、貝島では。他では……。他でも、あんまり、悪
かことすつき（すれば）ですねえ。うちたちやわにかたに、と
うちゃんがお酒も飲まん、ばくちもせんじゃつたですけん
ねえ、かわいがられとつたですもん、どこに行つても。人の
話しおんさつたすもんねえ。じゃけん（だから）、人の話し
おらすとの、「あらあ、そがんこともやつぱいあつとばい
ねえ」てゆうて。こつちの話しはなか。はい、むこうの方
じやろ。十年働くと、勤続賞でなつたすもんね、貝島
へんな。そいけんわりかたにほんによかつたすねえ。退
職金も八十何円ももろたですけんねえ。二十一年の時、
私が。八十七円じゃつたらうと思つたですよ。あ
のー、やつぱりそこの貝島のヤマでもつとまら
んで、夜逃げもしおんさつたすもん。はい。そがんとは、
压制されてじやなかつたすよ。やつぱいそこに

ありつかじ（そこにあわないで、居つくことができないで）じゃろておもとつですよ。それで坑内の条件が自分にあわんじやっただいすいぎ（自分に合わなかつたりすれば）ですね、夜逃げして、そしてお金ば借つとらすぎ（借りているならば）、こんだ（今度は）道具です（ね（払う））。せいぎうちん人の友だちのおとうさんが、せいせりおんさつたさ。「いくら、さあいくら」てゆうて、百円なら百円、五十円なら五十円借つとつぎ、そのいくらかにです。うちに買うたのあつてすよ、まだ。ハンドがめの八十銭と……、せいから……。はい、せりに出しんさつと、せらすとです。もういっばい人のあつてすね。そして、「さあー、こら（これは）いくらかー」て。うちのハンドがめが八十銭。今少ーしひびのはいつとるばつてん。せいから御飯をつぐとが、十五銭じやつた、もうそりや悪なつたばつてん。なんでんです、なんでんせりおんさつた。その時のタンスなんか、わりかたに（よかつたです）。そんなとき私が十九の時て思つた。タンスは十円で買つてもろたです。おんじさんから、あのーセットばです。もう五、六年前まであつたです。それ、それはよそにあげてした。「せいばほんに買つてくれらすとよかばつてんね、おんじさんの」てゆうて、おんじさんから買つてもろた。花嫁道具ということじゃなかつてん。

うち十八でなつたでしよう。せいけんがまだ二年ばつかり、うちかせせんなんじやつた。せいぎとうちちゃんにゆうて、「とうちゃんあがんじやつたなあ」てゆうて、「どがんじやつたとね」てゆうたら、「うん、お前をもらおうでちな（もらおうとするのには）二年間かせ（加勢）せんなんじやつた。二年間ではるたつぞー」てゆうたです、この頃。「あら、そがんじやつたな。いっちゃん（全然）知らんじやつた」てゆうて、二年間も。うちに買っててもろてすね。つけめしてゆうて、うちで御飯食ぶつてすたい。そしてうちでいっしょに、加勢して、そし

てずーと入れこんで、加勢していくとすたいね、いくらづつか。二百円ば入れこんでいくと。でくつときや、そりや五円なるかいくらになるかでしょうだい、毎月です。五円づつ入れたらちやいくらですかね、一年で。五十何円、六十円です。せいぎやつばい七、八円ぐらい払（は）たつじやなかるか、月々です。え。「たつたそがしこがいや（たつたそれだけ分）か」てゆうたら、「そがんおまえ、払いきつむんか（払う）ことができるものか」て。それで、四十五銭づつうちに、御飯代として、やりおつたです。四十五銭づつじやつたですもんね。御飯食ぶつとをとうちゃんが、払（は）うていくとすたい。べつに。せいよつか（その他に別に）別に。別は七、八円払てすね。食ぶつとすたい、とうちゃんが食ぶつとに。八円づつやつて、八十円とあとちよつとすね。ちよつど八円ぐらずつすね。せいも、うちのおとうさんは、もう几帳面かつたけん、ずーとせいも（それも）つけおんさつたとばつてん、やつばい燃やしてしもつてすよ。ずーと、ほんのこて、いくらやつたてゆうて。つけめしてゆうとは、炭坑のことばです。つけめしていいおつたですもんねえ。つけめしのことば（ことを）まいっちょ（もうひとつ）なんとかいうていいおつた。うちは、この頃聞いたです。

大納屋におれば、そがんふうなお金ば、四十五銭なら四十五銭払（は）うてすね、そしてずーと毎日毎働くとでしよう。そのことばなんて言うかねえ。うちはうちにおつて、そがんしてしてもろたけん、つけめしおらしたてゆうて、言いおうてたですもん。つけめして、やつばいいっしょに御飯食ぶつけんでしょうね。そがんふうにいおつたことば。ことばの悪かっでしよう、そりややつぱり。つけめしていうことは。結婚する時は、いっしょになるうかていうたごたあるふうです。え。正月はすね。もちはずーとつきやさんがまわりおんさつたです。ずーと、はい。もちづきの。「うちやどがしこな」てゆうて、うちの

前へんも、「うちや四斗もつくばい」て、「四斗もつくよ」てゆうて。

そんな頃は、ほんとに、今はもちああんまり食べちゃなかですばってんね、むかしやもちをほんにたいいつきおんさったですよ。もちつきさんのずーともう、町内町内にまわってきんさつとです。とてもにぎおうてつきおんさった。その頃もちつきちゅうのはいくらやったらかね、もちつきちゅうのはあんまり高うじゃなかつたですよ。いくらぐらいじゃったろか。ちょっと覚えとらんもんね。もち米が安かつたらけんな、そんな時は。ちょっと覚えん。お正月もそがんしてもちをつく。そんなときや、もう、うちたち娘ごろは、髪結さんにですね、髪結さんがね、日本髪ゆうとが二十五銭じゃつたです。せいけんもうぼんはですね、三円もらいおつたですよ、つかい銭は。三円もらうぎも、髪結ちんが二十五銭、もう夜は夜通しかかつて結いおつたですよ。ずーとつかえとおぎ、番とつて。はい、高島田でんですねえ、ゆいわたでん。わたしたちもたいてい結いおつたあー。日本髪結うたとの写真がひとつあつたばってん、もうおかしゆして見せらん。ちょっとおかしかと。はい、自分の髪でするとですよ。今はこがん髪しとつてすばってん、しよては（最初は）髪が長かつたでもん、みんな。せいけんそれにかもじ入れて、びんつけて、もうかつらでんなんでんなかつたですけん。みんな自分の髪で結いおんさつた。こがんとこにたぼ入れてちゃーんと。高島田でんなんでんですね。高島田どん結うたととつぎ（写真にとつていれば）よかつたですばってん、とつとらんでもん。

おとしだますねえ。おとしだまもらいおつたらうかねえ。どがんじやいろ。うちが小さか時、学校に行く時の前かけばもろたとですよ、友禅の前かけば。そいばもうしとうして、しとうしてたまらんもんじゃけん、つくらんでですね、紐ばはめて、かえってから、母から叱られたとおぼえとつです。はい、きれをもらたとです。友禅の前かけちゅうてですね。やっぱりがらの（あがんとを）もろたもんじゃ（もらつたもの

で）、もう学校に行く時、しとうしてたまらんじゃつたですもん。せいばつくりもせじ（つくりもしないで）していつて叱られた。それだけ覚えとる……

結婚式……。うちでもうまねかた（まねごと）ばっかりしてもろたですもん。高島田でんなんでん結うとらんですもん。ただ桃割れのごたあつと結うてですね、そしてうちでもろた。紋付きもなーんもきらんじゃもん。

戦争の頃ね。戦争の頃は、その小林坑におつたですもん。わりかたにあそこもおりよかつたですなえ。まあ配給がほら、米の少なかつたけん、少のうして、いくらぐらいじゃつたでしようかね。そがんだもうひとつも覚えとらんごたあつてすばってん、いくらかやっぱい……。よそよつかましじゃつたでしよう、炭坑は。そして、かんばんやらですねえ、あがんととの配給があつたですけん。炭坑はわりかたにですね、（よかつたです）。そんなときや、米の配給のやっぱい家族のよんによか（非常に多い）人は少なかつたでしよ、せいけんやっぱい、つわやりにんじんやら、にんじんじなな、だいこんやらですね、きつてたくさんにしてしおんさつた。だいでん（だれでも）、わたしたちも、つわといけ（つわとり）に行つたいたいして、だいこんごはんをして食べよつたあー。

あつちのなんていう炭坑かね、ありや、伊万里の手前の炭坑に、うちのいとこがあつたですもん。立川じゃなし、もうちよつと手前の、伊万里のちいと先んきに（ちよつと先のところ）、なんてゆうたかね。はいはい、楠久、久原、その手前はなんやつたかね、あすこの炭坑にいたとき、朝鮮の人がたいそうおんさつたですよ。うちはそんな時は、戦後じゃつたらあ（あれは）、むこさん（向こうに）行っておつたです。そのとなりの炭坑は、たいいてい朝鮮の人のたいそうおんさつたですよ、はい。うちはむここの炭坑じゃ、朝鮮の人はめかからん（見つからない）じゃつたですばってんねえ。こつちでも朝鮮の人なんかは、おつてな

ったですよ、むこうんにき（向こうの方に）おんさったじゃろ。この頃、新聞ばみおったら、いじめられたてゆうて、そんなに書いてあったです
ねえ、たいてい。いやそがんことも、朝鮮の人なんかの事、ひとつもき
かんかったですよ、こっちは、わたしたちは。むこうじゃ（筑豊などの
ことを指す）そがんこともありおったかもしれん、こっちはおってはな
かです。はい、聞かんじゃったですよ。

軍事教練みたいなのは、ありおったですよ。おいちに、おいちにてゆう
てです。男は竹やり、時にや、学校さん行って、竹やり訓練せんじゃ
った。うちたちタンカの操作とかなんとかていろいろです。バケツ
リレーもありおったですよ。もうおぼえんごと（覚えていないように）
ないおった、バケツリレーやら。

終戦の頃……。ほんとにもう長かことです。わからんごととなっ
てしました。どがんじゃったろかねえ。（聞いたのは）その小林炭坑じ
ゃったですよ。「そがんはずはなか」てゆうてです。ね、「そがん日本の
負けたいないしはせん」てゆうて、みんなもうないてです。ね。こ
がんで無条件降伏じゃったて聞いて、ひとりの人は、「そがんことは
なか。たいてい日本が今まで勝ちおったとに、そがんことのあーもんな
（あるはずがない）。負けたいないしはせん」てゆうてです。ね。
みんなあそこでもういっしょに集まって、涙ながしたですよ。はい。
ラジオ聞いたてしょうねえ、そのときや。どがんやったじやいろ（ど
ういうふうだったのか）知らんばってん。やっぱい集まって、「日本の
負け（負ける）ゆうことはなか」てゆうて、「負けとりやせん」て
ゆうてです。ね。うちやそんな時、婦人部長しとったですもん。そいぎも
ひよと敵のきたときや、子供に、たつたひとりはな（ひとりしか）娘
のおらんけんが、人の言うことを聞いてせないかんばい、かあちゃんと
別れてせんなんかも（しなくてはならないかも）わからんてゆうてです
ねえ。

弟は十九の時なくなりました。三つちがう。今は六十一になっ
て、今はです。ね。そんな時ちやうど、「ほんに行こたな（行きたく
ない）」てゆうたですもん、ゆうたてです。たい。私たちやもう家もろと
ったです。ね。したらおっかさんのもう、しよては青年宿てゆうて泊
り行きおったじやろ、友だちのうちに、そいぎおこし行って、「今日
は行こたなかばい」てゆうて、「行こたなかなら、なして前から、
前日からゆうとかんか」てゆうて、おこたごととして、おっかさんの。
したら、朝になつたら、もう今日は臨時公休てばいいてゆうて、事務所
の人のまわんさつたかなんかじゃつたら、そいぎ兄貴が、「あらーそい
ぎ（それなら）しもた（しまった）。あすこは（あそこは）少ーしガス
があつたあつたとん、あいどんがあんしとりやせんじゃろか」て
ゆうて、あんにちがわんとです。ねえ（ほんとにそうだったんです。ねえ）。
死んどったですよ。おが（オーガー）て、穴ばずーとくっていくとで
す。たい。そしてマイトかけて。こんだ（今度は）二番方にその穴くって、
ずーとマイトかけとて、今度朝一番の人が、そいば、ボタバはねて、
そして石ば出すとですもん。そいぎつくりおって、電気にスパークし
たかなんかでしょ。そんな時、もう三人、いっしょに死んどんさつたです。
もう何年頃ですかねえ。もう、ちよとわからん。はい。私は別になっ
とったですよ、すぐ下の家に。そんな時のお金がです。ね、九百円出たです
よ、九百円。そのー、弟が死んで。そりやお葬式もきれいにしてもろて
です。ね。九百円で、「ほんにもう許されん」てゆうてです。ね、兄貴がで
す。ね、ゆうたです。ばってん、どがんでしよんなかもん。九百円でゆうぎ、
大金じゃつたです。ばってん、石塔一本たてて、かれこれしおつたらなく
なつたですよ。九百円でなー、ほんのこて。

（あとがき）この聞書にあたっては佐賀県多久市々立図書館細川章氏
に御世話になった。心より感謝申し上げます。